

# 白藍塾オリジナル

## 2025年度 入試小論文分析&解答のヒント

2025年3月発行

白藍塾の入試小論文分析は、他の予備校と違って、その問題に対して受験生がどのようにアプローチすればよいのかを具体的に説明している。そのため、この分析を参考にすれば、誰でも合格レベルの答案を書けるはずだ。該当の大学・学部志望者は、ぜひ、これを読んで、自分で実際に答案を書いてみてほしい。

執筆・大原理志

### ● 慶応・文学部

例年通り、長めの要約問題+短めの小論文問題の2本立て。課題文は、世界文学の読み方について書かれたエッセイで、比較的読みやすい。だが、一貫した論理展開がされているわけではないので、筋の通ったまとめ方をするのはかなり難しい。あえて要点だけまとめると、次のようになる。

「現代の世界文学は、膨大で多様なため、かつてのような欧米先進国中心の見方では全体像が把握できない。それに対しては、芋づる式に、興味の赴くままに読み進めていくしかない。世界文学とは、そうした各自の読み方の問題でもある。読み方といっても、原文を精読してテキストを細かい所まで味わうべきか、翻訳で量をたくさん読むべきかという問題があるが、世界文学の多様性と普遍性を楽しむには、翻訳でたくさん読みながら、できるだけ多言語を学んで原文で読む努力をすることが大切だ」

設問Ⅰは、例によって全文要約が求められている。以上のような内容を、字数に合わせてまとめるとよい。

設問Ⅱは、「人間にとって文学を読むとはどのようなことか」について自分の考えを述べるのが求められている。課題文の最後に、「世界文学を読むとは、多様性と普遍性の間の永遠の往復運動だ」というフレーズがあり、これが筆者の考えを集約していると思われるので、この考えが正しいかどうかを問題提起するのが正攻法だろう。

ただし、設問には「世界文学」ではなく「文学」とあるだけなので、必ずしも海外文学のことを想定する必要はない。同じ国でも昔の作品や、同時代の作品であっても、自分とは異なる価値観や感性、体験などに触れながら、その底に共通する真実や人間性を見出すのが、文学を読むことの醍醐味とも言えるだろう。イエスの立場であれば、そうしたことをきちんと説明できれば、十分説得力のある内容になるはずだ。

一方、ノーの立場で書くのはかなり難しい。ただ、文学（とくに海外の文学）をわざわざ読むのは、それまで知らなかった世界や価値観に触れて自分の世界を広げたり、相対化したりするためという面がある。そうした観点から、普遍性も強調する筆者の考えを批判することもできるだろう。とはいえ、説得力のある根拠を思いつかなければ、無理にノーの立場で書く必要はない。

もちろん、もっと焦点を絞って、「原文で精読するのと翻訳でたくさん読むことのどちらがよいか」という問題提起で論じることもできる。だが、これだと、ある程度文学にくわしかったり、海外文学を読み慣れていないと、論を深めるのは難しいだろう。

いずれにせよ、課題文が「世界文学」について言っていることをちゃんと理解できているとアピールできれば、それで十分だ。

\* 執筆者の許可なく本紙の全部もしくは一部を無断転載、無断複写することを固く禁じます。

発行・白藍塾総合情報室 (03-3369-1179) <https://hakuranjuku.co.jp>